

「子どもたちが安心できる居場所について考える」を開催して

子どもにとって 安心できる居場所って どういうところ？

11月13日(土) パルセいいざかにて、映画『みんなの学校』上映会、木村泰子氏(初代大空小学校校長)と若月ちよ(理事長)との対談を開催しました。

映画では、発達障害や不登校だった子が共に学び、成長していく様子が描かれ、大空小学校の先生方の関わりや、地域の方の協力に感激を覚えると同時に、なぜ、このような公立学校が作れたのだろう、と疑問が湧きました。その疑問に対して、木村先生は「公立学校は、公のもの・みんなのもの、地域の学校であり、つまり子どもたちのものです。ですから、その地域の子どもたちが安心して学ぶ場所でないといけないのです。」と語られました。その言葉に納得すると共に、多くの学校がそうではない現状も感じました。

先生との対談から、子どもが安心できる場所を創るために、私たちが考えなくてはならないヒントをいただきました。

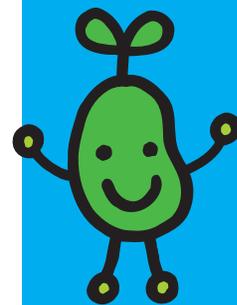
大空小学校のルールは「自分がされてイヤなことはしない」というたったひとつです。多くのルールで管理するのではなく、「オンリーワン」の子どもたちに合わせた対応をしていくことでした。そして、もし失敗しても、「やり直し」ができることを、子どもだけでなく、先生たちも、実践していくことで、共に育っていく姿が描かれていました。

前の学校で不登校だった子

どもがなぜ大空小学校には来ることができるのか、先生が尋ねたとき、子どもの答えは「空気が違う」でした。「前の学校は、刑務所みたいだった。思ったことを話したら怒られる。息ができなくなって教室にいられなくなる。」と。「大空小学校はどんな空気？」と尋ねると、「ふつう」と答えたのです。言い換えると、大空小学校は「思ったことを話すことができ、自分らしく居ることができ、息ができる場」、それが子どもたちの「普通の場」だということです。そうした場を創るためには、子どもの声を聴き、「子どもに教えてもらう」という姿勢に大人たちが変わっていくことであり、人として対等で尊重し合える関係であることです。そしてそれを実現していくために



ビーンズ 通信 vol.105



●発行日 / 2022年3月10日

●発行元

特定非営利活動法人

ビーンズふくしま

〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5

TEL&FAX 024-563-6255

URL <http://www.beans-fukushima.or.jp/>

E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

は、気づいた人から実践していくこと、というメッセージをいただき、これからもビーンズふくしまは子どもたちの安心できる居場所を子どもたちとともに創っていきたく、新たな決意をしました。

学校に行かない選択

佐藤さんは中学2年生の夏休み明け、周囲の人たちと折り合いが悪くなり、学校に通わなくなりました。

通いたくなくなった決定的な出来事はなかったものの、苦手だなあと思っていた人たちに、小学生のころから物を隠されたことや盗まれたことなど、つもりに積もったものが爆発したのかもしれないと当時を振り返っています。

中学生の頃の自分は、「微妙な奴」。嫌なことを嫌と言えず、ヘラヘラしていたな〜と話します。

友達と遊びたい気持ちはあるけれど、関わりたくない子もいる。夏休みまでは無理して行っていたけれど、学校に行く気力がなくなり、学校に行くことや友達と遊ぶことを諦めてしまったそうです。

しかし、家にいるのも罪悪感。学校に行かなくちゃいけないな〜という気持ちもありつつ、行けなくなってしまったという状況の中、「学校に行かない」選択肢があると気付いたと話します。

「フリースクール」という選択

中学3年生の時に両親からフリー

スクールを紹介されましたが、正直なところ最初は興味がなかったとのこと。でも、「なんとかしなくちゃな〜」という気持ちもあって、見学に。初めて行った時、一軒家で驚いたそうです。もし、学校っぽい雰囲気があったら入りづらかったと感じただろうな、と話します。

みんなでスマホのゲームをして、楽しそうなところだなと思い、ここなら行ってみてもいいなと、利用をスタート。

誰かと話したい気持ちがあっても、自分から話しかけるのは苦手だった佐藤さん。フリースクールでは、話しかけてくれる人がいて、自分



佐藤さんの成長

ビーンズふくしまは、「自分が望む姿で、つながることができる社会」を目標とする。ある青年が、人との関わりの中で、自分らしく伸び伸びと成長していった。「つながりあえる社会」のイメージを皆さんと共有できれば幸いです。

家族から見えたこと

佐藤さんの成長を寄り添い見守り続けていたご両親のお話も伺うことができました。

「フリースクール」を勧めた理由

学校に行けなくなったとき、「どうして自分の子どもが学校に行けなくなるんだ」と思い、最初は学校に行かせようとしたそうです。「行かせれば何とかなる」。しかし、ストレスで身体が動かなくなるほど、嫌がる

息子の姿を見て、「100人子どもがいれば、100通りの生き方がある。自分の子どもなのだから、その生き方を信じよう」と考えが変わったそうです。

フリースクールを知ったのは、ビーンズの「親の会」に参加している方からの紹介でした。フリースクールだったら、本人が同じ気持ちを分

かり合えるかもしれない、家族だからこそ話せないことがあっても、信頼できる友達や先輩がいると良いのではないかなと思ったそうです。

フリースクールにつながって

年齢・性別関係なくアットホームな感じの中で、家にいるときと違い、人との触れ合いが生まれている、と思ったとのこと。その頃は本当にシャットダウンしていた状態だったので、コミュニケーションがとれる場所があってよかったと話します。

の話聞いてくれることが嬉しかったと話します。

成長したと 感じること

「やりたいこと」、「やりたくないこと」を言えるようになったと話します。企画一つにしても、参加する・しない、他の子たちも自然に決めている様子を見て「断る」が出来ようになった。「嫌なことから逃げていい」ということも学んだそうです。

今、はっちゃけて、自分らしくいられるのは、「ボケた」時にちゃんと拾ってもらえて、行動を認めてもらえたからだと思う。自分がやってい

いことが広がる感じがあったと話します。

また、自分から話しかけることが苦手だったけれど、自分がしてもらったから他の人にもしてみようと声を掛けてきた佐藤さん。フリースクールは挑戦しやすい場だったからこそ出来たとのことでした。

同じような 悩みがある方へ

不登校になると一人の時間が増えます。一人の時間は必要だけど、過剰になると余計なことを考えてしまうし、やることもなくなってしまう、と佐藤さんは話します。

フリースクールは楽しくて、自分を受け止めてもらえる場所。殻が割れるというより、一皮むけたという言葉が自分にはしっくりきます。一人で過ごす時間が多いなら、フリースクールに行くと楽しいよ。

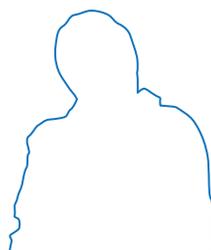
●佐藤さんとビーンズふくしまの出会い、彼が中学3年生の時、フリースクールに通い始めたことでした。高校卒業後は、福島県北・相双地域若者サポートステーションにて就職活動をし、現在は、働きながら、ユースプレイスで活動している、今年で二十歳になる青年です。

長物語

目指して日々活動を続けております。
本物語を3回にわたってお届けします。

1

フリースクール
ビーンズふくしま時代



また、親としても、「親の会」や「おやまめの会」に参加する中で安心につながったそうです。「学校に通っていない親同士」という共通項が気を遣わなくてすみ、むしろ学校行事の方が辛かったとのことでした。

そして、家庭の空気も変化したと感じたそうです。つながる前は、弟たちが本人に壁を作ったこともあったし、「学校に行かなくてズルい」という言葉もあった。フリースクールに通いだしてからは、会話が増え、棘のある言い方も減っていったそうです。下の子たちが学校で嫌なことがあった時、友達関係で悩んでいた

時に、聞き役になってくれていたそうです。

親から見た 子どもの成長

人の痛みを理解でき、人の心に寄り添い、踏み込んでほしくないところには踏み込まない。フリースクールで色々なことを経験して、知ることによって自信をつけ、今は自分で稼げるという自信をつけている。踏み出すきっかけをもらい、本人が経験を積んで、それが自信となる、という循環が生まれていると感じているそうです。

同じような悩みを 抱えている方へ…

「みんなと同じ」じゃなくいい。親も焦ることもあるし、目の前のことに一杯になり、周りの目が気になると思いますが、長い目で先を見ると、みんなそれぞれの人生で、同じなんてことはないです。

自分の子どもを信じてほしいです。自分の子どもが悪いはずは絶対にありません。

「第5回みんなの文化祭 Handmadeマルシェ」を 開催しました!



10月30日、コロナ禍ではありましたが、無事に「第5回みんなの文化祭Handmadeマルシェ」を開催することができました。

県外に避難し福島に戻ってきたママたちが結成した、ものづくりや趣味のサークルが、2017年1月に「復興交流拠点のみんなの家セカンド」ができた際、「おとなの部活」として引き継がれました。そのおとなの部活の発表の場として「みんなの文化祭」が企画・実施され、今回で5回目を迎えたのです。

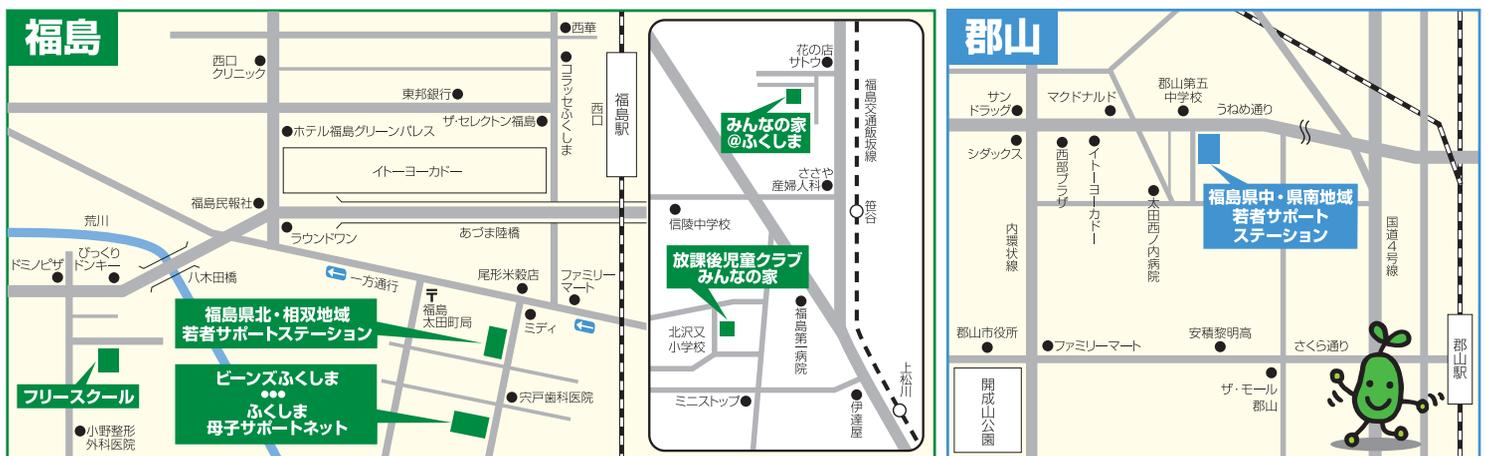
5回目となる今回は、ちくちく部、エコクラフト部、写真部、羊毛ふえると部、一閑張り部、レザー部の6つのおとなの部活の活動展示・販売をはじめとして、セカンドとつながりがあるパン屋さん、お菓子屋さんに加え、ビーンズふくしまから、県北・相双地域若者サポートステーション、フリースクール、ふくしま母子サポートネットの各事業が販売やワークショップを行いました。ビーンズ内での連携・協力によって、新たな展開や可能性のある、ビーンズらしさを併せ持った文化祭になりました。

また、遊びに来てくれた放課後児童クラブの子どもたちからは、「工作と買い物が楽しかった」「笛を作ったこと・バッチを作るのが楽しかったです」という声があり、文化祭の入場者からは、「余裕ができたら大人の部活にも参加してみたい」「通りがかりでしたが楽しかった」「もう少し他のサークル、団体を増やし楽しめる時間が欲しかった」などの声がありました。

おとなの部活は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、休止を余儀なくされた時期もあり、部員(利用者)さんからは、製作時間が少なかったことから販売物も少なく不安な声がかかれていましたが、当日は、部員さんたちが直接商品の説明をすることで「自分の作ったものを通して、直接お客さんと話すことが楽しかった」「色を変える

ことで選べる楽しさがあったようだ」「花のモチーフが人気なようなので商品化したい」などの感想や、今後の目標を聞くことができました。自分たちが作ったものへの意見や声が自信につながり、今後はこういうものを作ろうなどと意欲的になり、部員さんたちは、すでに来年の文化祭を見据えていました。

文化祭は一日限りですが、今後もおとなの部活では、ものづくりを通じた交流やつながりづくり、いきがよい達成感を一緒に共有できる場づくりを継続的に実施していきたいと考えています。



●ビーンズふくしまのホームページ はこちらへアクセス → <http://www.beans-fukushima.or.jp/>